

## エコ・へるす

長野県環境保全研究所ニュース 平成 19年(2007年)5月25日発行

安茂里庁舎 〒380-0944 長野市安茂里米村1978 TEL 026-227-0354 FAX 026-224-3415  
 飯綱庁舎 〒381-0075 長野市北郷2054-120 TEL 026-239-1031 FAX 026-239-2929  
 http://www.pref.nagano.jp/xseikan/khozen Email:kanken@pref.nagano.jp

## 鳥の目からみた草原の火入れ

霧ヶ峰の草原にすむ鳥の調査をはじめから、今年で4年目になります。霧ヶ峰は1950年代まで採草地として利用されてきました。しかし、1960年代に入ると化学肥料等の普及により採草はほとんど行われなくなりました。そして、現在、森林化がすすむ中でその草原をどのように維持管理していくかという大きな問題を抱えています。鳥、特に草原に暮らす鳥たち、ノビタキやホオアカ、コヨシキリなどにとって、そのような生息環境の変化はどのような影響を及ぼすでしょうか。1960年代に中村登流氏は、八島ヶ原湿原から強清水にかけての草原性鳥類の生息状況や今は霧ヶ峰からいなくなってしまうコジュリンの生態について調査を行いました。その調査と同じ八島ヶ原湿原の遊歩道を歩いて、最初に印象に残ったことは鳥たちが遠く感じられたということです。出現した鳥の数を記録していくのですが、湿原の中には多くの鳥がいるのに、遊歩道の周りにはあまり見られませんでした。また、1960年代の草原では優占種であったコヨシキリがまったく記録されなかったことは驚きでした。

調査をはじめて2年目の2005年、霧ヶ峰の中でも茅野市柏原財産区、白樺湖西斜面、大門峠から車山高

原スキー場にかけての草原では採草をやめた後も草原景観を維持するために火入れを行っているという話を聞きました。その草原への火入れは、昭和14年から現在まで約70年近く続いています。実際に、その場所に訪れたときの印象は強烈でした。遊歩道を歩いていると次から次と鳥が出てくる感じで、すごく鳥が近く感じられました。八島ヶ原湿原の周辺ではほとんど確認されなかったコヨシキリも多く確認されました。なぜこれほど鳥が多いのか、なぜコヨシキリが火入れ地区の草原には見られるのか、おそらく火入れという草原管理により植生の遷移が停止したことと関連があると思われます。

今年の4月15日、地元の人の好意により柏原財産区の火入れを見る機会がありました。組ごとに担当する場所が決まっており、防火線や境を焼いた後、実到手際よく火入れを行い、7時に開始して約2時間で約42haの広大な草山はきれいに焼き上がりました。この火入れは一般の方にはあまり知られていません。また、一昨年より諏訪市でも霧ヶ峰自然保護センター東の草原で火入れ事業がスタートしました。昨年は残雪が多かったことにより、必ずしも思うようにいかなかったように思います。また、今年は当日雨になったことから、5月に入って再度実施されました。採草地としての役目を停止した草原を維持する一つの方法として火入れの重要性は今後ますます高まるものと思われます。阿蘇のような約1,000年も火入れが続いているところもあります。そのような先進事例を参考にしながら、霧ヶ峰全体の草原を維持する一つの手段としてどのように火入れを活用するべきかを検討する必要があると思います。今後も、草原にすむ鳥の視点からこれからの霧ヶ峰の草原を見つめていきたいと思っています。

(堀田昌伸 kanken-shizen

@pref.nagano.jp)



今年の4月15日に茅野市柏原地区で行われた火入れ

目次	鳥の目からみた草原の火入れ . . . . . 1	学会いろいろ . . . . . 5
	さらなる機能の向上を . . . . . 2	平成18年度研究報告の概要 . . . . . 6
	トピックス . . . . . 3	「車軸藻シンポジウム in 野尻湖」ご案内 . . . 8
	トピックス . . . . . 4	研究所日記・次号のご案内等 . . . . . 8

## さらなる機能の向上を

4月1日付けで所長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いたします。

当研究所は、感染症及び食中毒の原因となる細菌やウイルスの検査から地球温暖化など地球環境問題、生物多様性の保全に係る調査研究まで、県民の皆さんの関心の深い保健衛生や環境について大変広い領域を対象に調査研究を進め、県行政をサポートしています。

衛生公害研究所と自然保護研究所が統合されて当研究所が発足して4年目を迎えましたが、来年は前身である衛生公害研究所がスタートしてから60周年に当たります。この間、時代の要請に応える県行政の展開に伴い、研究領域を広げ、その機能を高めてきたところですが、近年の健康や環境に対する県民の皆さんの願いや関心の高まりと、行政を中心とした当研究所に対する多様なニーズに的確にお応えしていくためには、更に機能を高めていくことが必要です。

このため、「お客様第一、高信頼性、日々イノベーション、コスト意識」を基本姿勢として所運営、試験研究業務の更なるイノベーションを進めてパワーを高め、県行政を科学的、技術的にサポートする県民に開かれた信頼される研究所を目指してまいりますので、ご理解とご支援・ご協力をお願いいたします。

### 所長 鷹野 治



### 次長(安茂里庁舎)兼企画総務部長 松沢 克典

4月1日付で次長(安茂里庁舎)に着任いたしました。よろしくお願いたします。

15年ぶりの環境保全研究所には、新たな環境、衛生問題【ダイオキシン、アスベスト、食品中の化学物質、ノロウイルスの検査等】に対応するための検査機器【ガスクロマトグラフ質量分析計等】と精密な測定を行うための検査室が整備されており、環境問題の広がりや検査法の進歩を強く感じました。

安茂里庁舎では、大気・水・土壌の汚染物質のモニタリング調査や食品中の化学物質の測定、感染症に関わる微生物学的・ウイルス学的検査を主要な業務としています。

豊かな環境を保全し、県民の皆様の健康と安全を守る、開かれた研究所を目指して、検査技術の向上や精度管理の充実を図るとともに新たな環境問題を分かりやすく説明する情報誌の発行や出前講座等に積極的に対応してまいります。

また、7月末には、研究所の活動を知って頂く施設公開にあわせて「夏休み親子環境講座」も企画しております。たくさんの方にきて頂きたいと考えております。

研究所には、いろいろな分野の環境・衛生問題の専門家がいますので気軽にご相談下さい。



野外調査をしています

### 次長(飯綱庁舎) 倉沢 明人

飯綱庁舎に勤務して2年目となります。

長野県は、南北約200キロに及ぶ広大な県土に万年雪を頂く北アルプスや南アルプスなどの峰々が聳え、非常に多彩で豊かな自然環境が広がっています。そして、私達は、様々な動植物が織りなす精妙な生態系の中で生活しています。

長野県の素晴らしい自然環境を大切にし、より良くし、未来へ伝えていくことは、豊かで安心できる県民生活を確保する上での私どもの重要な使命です。

飯綱庁舎では、この自然環境を保護・保全するため、動植物の生態など様々な分野で調査研究を行うとともに、研究所の専門的な知見を活用して県民の皆さんの活動や県・市町村行政を積極的にサポートしています。

現在、希少野生動植物の保護・保全、外来生物への対処等を主要な課題として調査研究活動を行っていますが、常に県民の皆様様の望むものであるよう課題を的確に把握して活動を展開してまいりたいと思っております。

また、豊富な専門的知識を持つ研究スタッフが、得られた成果や保有する情報を広くお伝えしながら各地域で展開されている自然環境の保護・保全活動へ支援することも大切な任務と考え、さらに積極的に進めてまいります。



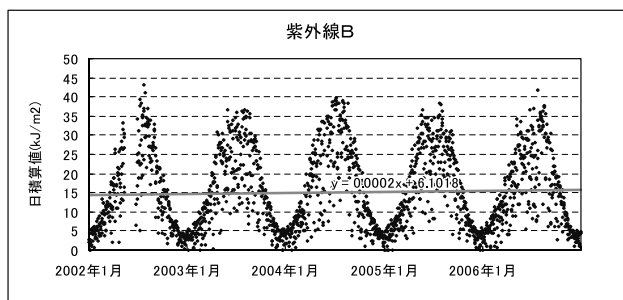
敷地の整備をしています

## トピックス

## 紫外線が特に気になる季節になりました

紫外線は波長によってA領域紫外線( UV-A 315nm~ 400nm)、B領域紫外線( UV-B 280nm~ 315nm)、C領域紫外線( UV-C 100nm~ 280nm)の3つに分けられます。そのうちUV-Cは大気中の酸素分子やオゾン層で完全に遮られ地表にはとどきません。生体への影響が強い紫外線のうちUV-Bはオゾン層でその多くが吸収されますが、残りの一部が地表に到達していることから、オゾン層の減少に伴い地表への到達量の増加が問題とされています。

当所では、1997年から紫外線( UV-B)の測定をしています( 右写真)。ここ5年間の1日のUV-Bの積算値の変化をグラフにしますと左図のようになります。毎年7月末くらいに最大となる一山型の変化を示しています。全体してみると、今のところ、特段の増加傾向はみられていません。



紫外線量は7月ピークになる



測定機器

なお、紫外線の強さによる人体への影響についてわかりやすく表に分類した「UVインデックス」があります。気象庁のホームページ( <http://www.jma.go.jp/> )では「今日の紫外線の予測分布図」がUVインデックスで表示されています。また、環境省では「紫外線保健指導マニュアル2006」( <http://www.env.go.jp/> )を作成して紫外線への注意を促していますので、一度ご覧いただければと思います。

( 児玉 家起 kanken-hozen@pref.nagano.jp )

## 飯綱庁舎の自然学習への利用

飯綱庁舎は、一般の方々が利用可能なスペースとして、エントランスホールや会議室、図書閲覧室などを備えています。また、15haの広大な敷地には自然散策路があり、自然学習等のために自由にご利用いただいています。個人やグループでおいでいただく他に、小学校が総合的な学習の時間や林間学校などの自然体験学習の場に利用することもあります。

毎年5月～8月には、長野市内の小学校5・6年生が飯綱高原学校の一環で訪れます。平成17年( 2005年 )は15校( 1438名 )が、平成18年( 2006年 )には13校( 1204名 )がやってきて、敷地でのエコクイズラリーに挑戦しながら、自然散策を楽しみました。今年もこれから大勢の小学生がやってくると思います。その小学生の自然観察を充実したものにするため、ボランティアの方々にもご協力いただいています。

その他、年間を通した自然体験学習の一部として飯綱庁舎を利用していただいたこともあります。平成12年( 2000年 )には、長野市柳原小学校3年生が、野生動物を扱った「いのち」の学習の一環で、飯綱庁舎の敷地を利用したことがありました(「みどりのこえ」No.16参照)。子どもたちは、校庭や地域を使ったさまざまな学習の一部として飯綱庁舎の敷地の中で体験学習を行いました。このときには担任の先生方が、年間の授業計画の中で飯綱庁舎をどのように使うかについて、事前に余裕をもって打ち合わせにこられたことがよかったと思います。これからも自然学習の一助にご利用いただくために、施設の整備を進めてゆきたいと思います。

( 陸 斉 kanken-junkan@pref.nagano.jp )



敷地の森で思い思いに基地をつくる小学生( 2000年11月 )

## トピックス

## 新しいGC / MSが入りました

ポジティブリスト制度（基準が設定されていない農薬等が一定以上含まれる食品の流通を原則禁止する制度）が去年5月に施行され、当所でも残留農薬をより厳しい基準のもとで検査する必要性ができました。それに対応するために、昨年10月に、新しいガスクロマトグラフ質量分析計（以下GC / MS）が配

備されました。（GC / MSは微量な物質であっても検出することが可能な機器です。）

この新しいGC / MSは、“K9（ケーナイン）”とちょっとカッコイ名前と呼ばれています。この“K9”は操作がしやすく感度が比較的良好いため、ポジティブリスト制度で定められた基準値も十分に測定することができます。また、メンテナンスもしやすいよう工夫されているため、部品の洗浄なども容易にできるようになっています。

多種類の農薬を効率よく測定することが求められるなかで、まさに活躍する機器の1つとなりそうです。

（山本明彦 kanken-hoken@pref.nagano.jp）

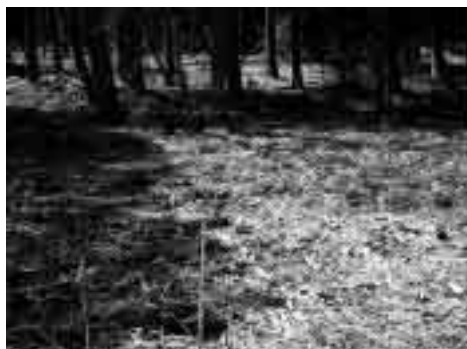


当所に新しく仲間入りしたGC/MS“K9ケーナイン”

## ザゼンソウ受難の春



例年の群生地の様子（白馬村 2002年 4月 16日）



今年と同じ場所の様子（白馬村 2007年 4月 15日）

今年の4月、白馬村のザゼンソウ群生地では花の見頃をむかえても、例年のような仏炎苞の群生が見られませんでした。日本有数の群生地である飯森地区でも、今年は十分の一くらいしか見られないとのこと。白馬村のいくつかの群生地を見て回りましたが、ほとんど仏炎苞が出ていない群生地もありました。この主な原因は、晩秋期にクマが餌として食べたためと考えられます。根元が掘られて茎ごとなくなった株や、ロケット状をした展開前の捲いた葉の上部が食いぢられた状態を各地で観察されたからです。また、この冬は雪が少なく雪解けも早かったことで、地上に露出した展開前の葉や仏炎苞が霜や凍みの影響を受けて黒くなったものも多く観察されました。

ザゼンソウは晩秋期に、長さ5cmから10cmくらいのロケット状をした展開前の葉を地上に出して冬を越します。この時期にはすでに小さな仏炎苞が地上に顔を出しています。餌不足の昨年、クマは冬を越すためこれらの葉や仏炎苞、茎などを採食したものと思われます。これほど多くザゼンソウが食べられたのは異常事態というほかありませんが、毒草とされるザゼンソウもクマにとっては生きていく糧として役立ったといえるかもしれません。生命の不思議なつながりを再認識させられた今春の出来事でした。

（大塚孝一 kanken-shizen@pref.nagano.jp）

# 学会いろいろ

研究所と関わりのある学会を紹介します！

## 日本植物学会

シンポジウム『絶滅危惧水生植物、  
車軸藻類の保全生物学をめざして』

日本植物学会は植物に関する広い研究分野を対象としている学会です。平成 18年 9月に熊本大学で日本植物学会第 70回大会が開催され、その中の標記のシンポジウム（通称 車軸藻シンポジウム）に参加しました。

車軸藻類は陸上植物の直接の祖先といわれている植物で、湖沼、水田、ため池等の水底で生育します。野尻湖で当所等が行っている水草復元活動の象徴となっているホシツリモは車軸藻類の一種です。車軸藻類を含む湖沼の水草帯は汚濁の分解機能を有し、動物の生息場所として利用されるなど、沿岸の生態系において重要な働きをしていました。しかし車軸藻類は環境の変化に弱いため、近年は消滅したり、著しく減少しており、国内で現存する殆どの種が野生絶滅種～絶滅危惧種に区分されています。

シンポジウムでは車軸藻類の保全を目的に、国内分布、先端技術を用いた分類・培養保存、そして自然界における復元まで、広く議論が行われました。当所からは野尻湖のホシツリモに関する復元活動と環境教育について報告しました。ダイバーによる水深 7m 地点での復元活動や、児童・地域住民を対象とした環境教育活動に関心が寄せられました。なお、本年度はこれらの内容に新しい演題を加え、野尻湖の水草復元活動を詳しく紹介する『車軸藻シンポジウム in 野尻湖』を信濃町で開催します。詳細は本紙 8 ページの開催案内をご覧ください。

（樋口澄男  
kanken-hozen  
@pref.nagano.jp）



会場で配布された『ししじくも』パンフレット

## 日本生態学会

<http://www.esj.ne.jp/esj/>

生態学のあらゆる側面を扱う学会で、設立は昭和 24 年までさかのぼります。会員数は約 3,800 人、英文誌『Ecological Research』（年 6 冊）のほか、国内向けの『日本生態学会誌』（年 3 冊）と『保全生態学研究』（年 2 冊）を発行しています。また、自然保護専門委員会、生態学教育専門委員会など各種委員会が組織され、政府への要望書のとりまとめ、シンポジウムの開催など幅広く活動しています。

年 1 回の大会は、昨年度は 3 月 19 日～ 23 日の日程で四国の松山市（愛媛大学）で開催されました。全体では約 1,100 名が参加し、一般講演（ポスター、口頭）が 935 題、シンポジウム 10 テーマ、自由集会 31 テーマ等の活発な研究発表が行われました。最近の分析手法の開発・普及にともなって、生態学分野としての守備範囲が広がっていると感じました。当所からも次のタイトルで発表を行いました。

- ・絶滅危惧植物タデスミレの生育環境と個体群構造  
尾関雅章、大塚孝一、須賀 丈（長野環境研）  
小山泰弘（長野県林業総合センター）
- ・ニジマス除去後におけるイワナ個体群の反応  
山本 聡、河野成実（長野水試）、北野 聡（長野環境研）

また、2002 年から親善企画としてフットサル大会が行われています。こちらも本大会同様に年々熱を帯びるようになっていきます。

（北野 聡 kanken-shizen@pref.nagano.jp）



所員によるポスター発表の様子

## 平成18年(2006年)度 研究報告の概要

「長野県環境保全研究所研究報告 第3号」を発刊しました。掲載した全論文の概要を紹介します。内容を詳しく知りたい方は、研究所(企画総務部)までお問い合わせください。

### 総 説

#### 中部山岳地域における大気中酸性・酸化性物質の挙動 - 粒子状二次生成物質の長距離輸送と火山ガスによる環境影響

/ 薩摩林 光

中部山岳地域の八方尾根(標高 1850m)における大気質は東アジアの自由大気下層を輸送される汚染物質を代表すると考えられる。本報では八方尾根において、大陸から輸送されてくる汚染物質および 2000年7月に噴火した三宅島火山の火山ガスの輸送中の光化学反応により生成される  $\text{SO}_4^{2-}$  や  $\text{NO}_3^-$  などの粒子状二次汚染物質の挙動について解析した。

**キーワード:** 光化学反応、大気汚染、エアロゾル、降水、硫酸イオン、火山ガス、三宅島、長距離輸送、山岳地域

### 原著論文

#### ギフチョウ (*Luehdorfia japonica*) の産卵環境選択

/ 尾関雅章・須賀 丈・浜田 崇・岸元良輔

ギフチョウの産卵環境選択についてロジスティック回帰分析を用いて検討した。生息地の食草、植生、光、および地形環境から、ギフチョウの産卵の有無を予測するロジスティック回帰モデルを構築し、AICによるモデル選択を行った。

**キーワード:** ギフチョウ、産卵環境、食草密度、開空度、ロジスティック回帰分析

### 研究ノート

#### 植種 -ばっ気 -トレンチ法 (SAT法) による山岳地域のし尿処理

/ 鈴木富雄・村上隆一

山岳地域対応のし尿処理装置の一つである植種 -ばっ気 -トレンチ (SAT) 法について、標高約 2500m の山小屋で現地実証調査を行った。

**キーワード:** し尿処理、汚水処理、生物処理、土壌浸透処理、山岳地域

#### 最終処分場浸出水・処理水のバイオアッセイの検討

/ 堀内孝信・佐藤民雄・柳澤英俊・鹿角孝男・山本一海  
廃棄物最終処分場浸出水及び処理水のバイオアッセイに向けて、発光細菌を用いたバイオアッセイにおける阻害率に及ぼす塩濃度の影響について、高濃度食塩水を模擬試料として用いて検討した。

**キーワード:** バイオアッセイ、発光細菌、廃棄物最終処分場、浸出水、塩濃度

#### 農産物中の残留農薬の検査結果 (平成 14年度 ~ 17年度)

/ 花岡良信・石原祐治・清水修二・小山和志・宮澤衣鶴・小平由美子・宮島洋子・中野文夫・和田啓子

平成 14 ~ 17年度までの 4年間に当研究所で行った農産物中の残留農薬の検査結果を集計し、解析を行った。

**キーワード:** 農産物、残留農薬

### 資 料

#### 長野県北部における二酸化硫黄濃度上昇事例

/ 中込和徳・山下晃子・梶野瑞王・原田 勉・薩摩林 光

2005年 5月 29日に長野県北部で観測された二酸化硫黄濃度上昇事例について、大気常時監視データ解析、後方流跡線解析および数値モデル計算を実施した。

**キーワード:** 浅間山、二酸化硫黄、後方流跡線解析、数値モデル、八方尾根測定局、大気常時監視データ

#### 長野県東部における浅間山噴火による大気及び降水への影響

/ 山下晃子・二木克己・西澤洋一・木村元一・中込和徳・薩摩林 光

2004年 9月に中爆発を起こした浅間山の火山ガスによる長野県東部における大気及び降水への影響について検討した。

**キーワード:** 浅間山火山、二酸化硫黄、硫酸イオン、大気汚染、エアロゾル、降水

### 採石跡地の温度環境と植栽による植生回復状況

／小山泰弘・浜田 崇・片倉正行

採石跡地の最終残壁を緑化するため、クヌギやコナラなどのブナ科樹木を植栽した。植栽地の温度環境や植栽基盤の土壌条件と、植栽木の成長量について検討を行った。

**キーワード：**採石跡地、植生回復、温度環境、コナラ、成長予測

### 霧ヶ峰高原の山麓集落による高原資源の利用と生業の変遷 - 近世から近代を対象に -

／浦山佳恵

文献類や聞き取り調査から、霧ヶ峰高原における近世から昭和初期までの山麓集落による資源利用、資源の利用規制の変化、生業の変遷を明らかにした。

**キーワード：**二次草原、生業、入会林野、利用規制、霧ヶ峰高原

### 過去 100年にわたる里山の環境変遷復元の試み - 飯綱町矢筒山の事例 -

／富樫 均

長野県上水内郡飯綱町の矢筒山において、写真資料や住民への聞き取り調査結果などをもとに、過去 100年にわたる身近な里山環境の変遷を明らかにした。

**キーワード：**里山、環境変遷、飯綱町、矢筒山、聞き取り調査

### 野尻湖におけるブルーギル・ブラックバス類の繁殖状況

／北野 聡

野尻湖の沿岸域 2 箇所において潜水観察を行い、オオクチバス、コクチバスおよびブルーギルの繁殖状況を記録した。

**キーワード：**野尻湖、オオクチバス、コクチバス、ブルーギル、繁殖時期、繁殖場所

### 飯綱町矢筒山の植物相

／川上美保子・大塚孝一・富樫 均

矢筒山はかつてその多くが耕作地として利用されていた時期があり、その後約 50 年が経過し、畑地として利用されなくなって自然林が再生した場所である。2005 年から 2006 年の 2 ヶ年にわたり飯綱町矢筒山の植物相を調査した。

**キーワード：**飯綱町、矢筒山、植物相

### 麻しんウイルス H1 型の成人麻しん集団発生事例

／中村友香・徳竹由美・粕尾しず子・小林正人・和田啓子・岡村雄一郎・赤沼益子

2003 年に県内で麻しんウイルス H1 型を原因とする成人麻しんの集団発生が確認された。この事例について、発生状況を調査するとともに、IgG avidity を測定し初感染、PVF (一次免疫応答) もしくは SVF (二次免疫応答) の鑑別を試みた。

**キーワード：**麻しん、成人麻しん、麻しんウイルス H1 型、IgG avidity

### 2006 年の長野県におけるエンテロウイルス 71 型分離状況

／高橋夕子・畔上由佳・粕尾しず子・中沢春幸・

小林正人・和田啓子

2006 年感染症発生動向調査事業において、長野県の手足口病患者報告数は全国平均を大きく上回り、当所に搬入された手足口病をはじめとする患者検体から EV71 が例年になく高率に分離されたので、その概要を示した。

**キーワード：**発生動向調査事業、手足口病、エンテロウイルス 71 型

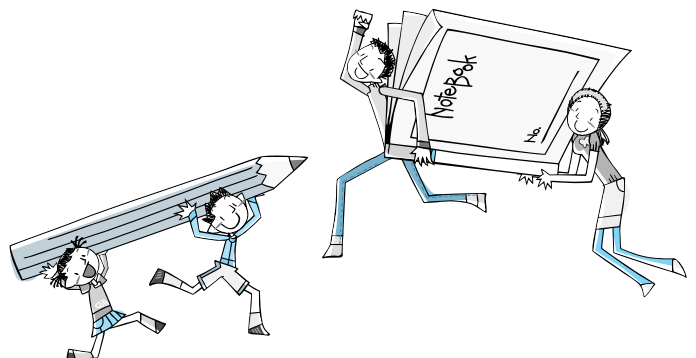
## 報 告

### 分布データは絶滅のおそれのある昆虫類の保全対策にどのように生かされるか? - 長野県の現状と課題 -

／須賀 丈

「長野県版レッドデータブック」の掲載種、長野県希少野生動植物保護条例にもとづく保護対象の選定において、標本ラベルなどに記された昆虫類の分布記録がどのように用いられたかを報告し、今後の課題をまとめた。

**キーワード：**レッドデータブック、条例、データベース、絶滅危惧種、生物多様性



## 研究所日記

## 飯綱庁舎の様様替え

循環型社会部の職員 9名は、安茂里庁舎（6名）と飯綱庁舎（3名）の両庁舎に勤務しています。このうち飯綱庁舎常勤者は、これまで自然環境部の職員と同じ1階で仕事をしてきましたが、本年度から、その場所が2階に移りました。庁舎の有効利用を進める一環です。その結果、1階には標本庫や実験スペースと自然環境部の研究室が、2階にはエントランスホールや図書閲覧室など一般に公開されているスペースとともに、事務室と循環型社会部の研究室が配置されました。飯綱庁舎にお越しの際は、図書閲覧室の隣になった循環型社会部の部屋にお気軽においでください。

（陸 齊 kanken-junkan@prefnagano.jp）



循環型社会部の新しい作業スペース(一部)



届けられたペチュニアの花

## 裾花小学校から花鉢をいただきました

去年から安茂里庁舎は、「子どもを守る安心の家」になっています。

5月7日、裾花小学校とPTAが、お礼にと子どもたちと丹精を込めて育てた花の鉢を届けてくださいました。今後も地域の子たちの安全・安心を見守っていきたいと思います。

（企画総務部）

## ご案内 “車軸藻シンポジウム in 野尻湖” が開催されます

野尻湖の水草復元活動のシンボル“ホシツリモ”は、湖やため池の水底で生育する車軸藻類という植物のなかまです。車軸藻類は環境の変化が著しい国内の多くの湖沼で減少や消滅が進んでいます。“車軸藻シンポジウム in 野尻湖”では、全国の分布状況、新しい分類方法や保存方法、そして野尻湖や千葉県で行われている車軸藻類や水草の復元・保全の活動などを紹介します。参加は無料です。皆様のご参加をお待ちしております。

と き：平成19年7月21日(土) 13:00~17:00

と ころ：信濃町公民館野尻湖支館（信濃町大字野尻303）

交 通：JR信越本線黒姫駅からバス(野尻湖行き終点まで)で15分、停留所前が会場  
上信越自動車道信濃町ICから野尻湖まで車で5分

問合わせ先：当所安茂里庁舎 TEL 026-227-0381 担当：樋口澄男

当所飯綱庁舎 TEL 026-239-1032 担当：北野 聡

野尻湖ナウマンゾウ博物館 TEL 026-258-2090 担当：近藤洋一

## 編集後記

17号をお届けします。今回の内容はいかがでしたでしょうか。

本誌は、長野県環境保全研究所や、長野県の環境保全および保健衛生に関する情報をわかりやすく提供することが目的です。お気づきのことがありましたら、お気軽にご連絡ください。

（編集担当:企画総務部）

## 次号のご案内

次号は7月に発行予定です。「最近の話題」「外部評価報告」「出前講座」「自然ふれあい講座報告」等を掲載予定です。